



筑紫女学園大学リポジット

The Possibilities of Collaborations for Regional Societies in Activities of Museum Groups Influenced the Central Area: Callaboration Activities in "Archaeology in Novels: Seicho Matsumoto's Literary Works and the Near East" at the Middle Eastern Culture Center in Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, 足立, 拓朗, OHTSU, Tsadahiko, ADACHI, Takuro メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/391

中央志向型博物館における地域連携の可能性
— 中近東文化センター企画展「小説に読む考古学
— 松本清張文学と中近東—」の地域連携活動 —

大津忠彦・足立拓朗

The Possibilities of Collaborations for Regional Societies
in Activities of Museum Groups Influenced the Central Area:
Collaboration Activities in “Archaeology in Novels:
Seicho Matsumoto’s Literary Works and the Near East”
at the Middle Eastern Culture Center in Japan.

Tadahiko OHTSU · Takuro ADACHI

1. はじめに

近年の博物館では様々な地域連携活動が実施されている。博物館は従来の機能に加えて、地域の文化活動の拠点として活動することが求められているからである。従来、「モノ」中心だった博物館の活動が「ヒト」中心に転換し、市民にとってより親しみ易い博物館に生まれ変わろうとしている。このような転換を行うことは、単独では難しく、また効果も薄い。そのため、地域の様々な機関との連携が模索されている。

地域連携を考える上で、「地域博物館」という概念は非常に重要である。伊藤寿朗によって考案されたこの概念（伊藤 1986, 1993）は、地域に暮らす市民と博物館の関係を構築する上で欠かせないものとなっている。本稿では、まず現在の研究を概観しながら地域博物館の概念を再考する。そして、様々な博物館で実施されている地域連携を紹介する。その後、東京都三鷹市の中近東文化センターの地域連携を報告し、その位置づけを行う。中近東文化センターが2005年度に開催した「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -」展における地域連携は、新たな地域の価値を創出させる取組みであり、地域の文化拠点を形成するための有効な手段の一つと言える。本稿では、その活動の特徴を紹介し、新たな博物館活動における地域連携の重要性について述べたい。

2. 現在の地域博物館について

伊藤寿朗は地域博物館の条件として、「人びとの生活の場としての地理上の範囲（広がり）を前提に、資料の価値に関する専門領域相互の関係性（深まり）、そして各種活動における市民相互の関係性（高まり）を組織化（編成）していくこと」を挙げた（伊藤 1993:157-158）。そして、博物館を地域志向型、中央志向型、観光志向型に分類し、地域博物館（地域志向型）は中央志向型博物館とは以下の2点で異なると考えた。第一に資料の価値付けでは、「地域課題を軸とした迫り方、再編成、その総合性のなかに新しい価値を発見」（伊藤 1993:159）することとし、第二に地域博物館の課題を「地域に生活する市民自身の自己学習能力を刺激し、育み、自分で自分の学習を進展させていく力量（自己教育力）の形成を図る」（伊藤 1993:160）ことであると述べた。いずれも、かつて多くの博物館でモデルとなっていた中央志向型の博物館の活動とは一線を画するものであった。地域博物館を単なる市町村単位の区域を管轄する存在ではなく、「人」中心の博物館活動を実施する存在として位置付けたことは重要である。この伊藤の提言以後、地域博物館に関する様々な議論がなされるようになった。

村上義彦は、全国に多く見られる郷土博物館や郷土資料館の内容はいずれも地域博物館であると述べている。「郷土」という概念自体が、ドイツから明治20年に導入されたもので、すでに現在の状況にはそぐわないため郷土博物館という概念を新しく構築し直し、地域博物館と位置付ける（村上 1995:1-2）、としている。そして、村上は地域博物館を「従来の美術館や大規模広域館とは違い、特定の地域に密着した館であり、またそのように運営されるように位置づけられているもの」とも述べた（村上 1995:110）。村上と伊藤の地域博物館の概念は同じではないが、従来の中央志向型の大規模広域館と異なる方向性を明確にしている点では一致している。

金山善昭は、野田市郷土博物館の事例を紹介しながら、ソーシャル・マーケティングという観点から地域博物館と教育普及活動を論じている（金山 1999）。ソーシャル・マーケティングの目標は、反対の考えを持つ人や反対の行動をとる人々の意見を変えたり、新しいアイデアを採用させたりすることであると言う（金山 1999:21-22）。金山は個別の事例で、博物館におけるソーシャル・マーケティングの目標を説明しているが、これを要約すると、地域に埋もれていた存在やその価値を新たに評価し、地域社会における位置付けを行い、その価値による住民の自主的な活動を促し、新たなコミュニケーションの場を作り出すことと考えられる（金山 1999:22）。また金山は、「これからの地域博物館は、地方分権社会を実現するために、住民による「まちづくりの心を育てる」ことを新しいパラダイムとして提唱したい」（金山 1999:125）と述べ、地域博物館の未来についての提言を行っている。金山は、伊藤や村上の論じた地域博物館の可能性をさらに進め、地域博物館の未来像を提示したと言える。

2001年には、川添登の監修になる『地域博物館への提言』が出版された（川添 2001）。同書は、1995年9月21日、22日に実施された集中討論（於：乃村工芸保養所「海岸倶楽部」）の記録であり、討論形式のまま出版されている（川添 2001:232）。すでに13年以上経過しているが、地域博

博物館を考える上で総括的な内容を備えている。この中で、高橋信裕は「地域博物館の定義そのものが近年揺れてきています」（高橋 2001:17）と述べ、本稿でも解説した伊藤説から遡って地域博物館を概観している（高橋 2001）。これに対して、同書内で端信行は、伊藤説の地域博物館について「現実にはそれに適合する博物館はほとんどないということになります」（端 2001:28）と述べ、同書収録のディスカッションでは「県（立博物館：著者追加）以下のタイプのものはだいたい地域型と見ていました」と発言しており、伊藤説の地域博物館は「これからの博物館の姿」と述べている（川添 2001:32）。伊藤説の地域博物館の概念を認めながらも、それが理想の姿であり、現実の博物館の活動にはあてはまらないことを指摘している。また伊藤説の地域志向型、中央志向型、観光志向型の分類は、実際の博物館にあてはめることが難しく、多くが3つを兼ね備えていると述べ（端 2001:28）、現実の地域博物館の活動を考える場合には伊藤説の見直しの必要があることを示唆した。

金山善昭は、前述した地域博物館と地域連携の提言をさらに進めて「地域博物館学」を提唱している（金山 2003）。そして、地域博物館学を地域博物館史論と地域博物館構造論に分けて論じている。金山の地域博物館史論では、地域博物館の存在を戦前の郷土博物館に遡らせており、戦後は郷土教育という観点から、社会教育機関としての地域博物館が普及するようになったと述べ（金山 2003:33）、伊藤説の地域博物館の概念を地域博物館史論の定義に採用しておらず、郷土博物館を地域博物館として捉えるなど、前述の村上（1995:1-2）に近い意見となっている。

金山による地域博物館成立の流れは以下のようにまとめられる。まず地域博物館とは、地方公共団体の博物館が主である。それらは、研究者や住民の運動によって公立博物館として設立されたり、地方公共団体の記念事業として建設されたりしたものもあった。1963年には、文部省（当時）から告示された「公立博物館の設置及び運営に関する基準」によって地方公共団体の博物館（地域博物館）は、様々な充実が図られることになる。そして、いわゆる高度経済成長期には文化財の保護に関心が高まり、文化財の保管機能に重きを置いて各地に設置された歴史民俗資料館も地域博物館に含まれるとした。そして、1980年代後半から1990年代初めに地域博物館の多くが時代の要請にそぐわないものとなり、伊藤説の「地域博物館」の概念が登場する（金山 2003:33-49）。金山は、伊藤説の地域博物館を評価しているが、地域博物館の定義をもっと広く考えており、「地域博物館は、市町村や都道府県、地域社会を射程にいった活動をする財団法人やNPOが管理運営するもので、学問分野は総合・人文・自然・理工系など多様で、博物館法上の登録要件にはとらわれないものとする。国内の博物館の大部分は地域博物館に含まれる」（金山 2003:64）と定義している。また、金山は地域博物館の活動として地域の住民・学校・行政との連携による地域文化づくり（金山 2003:168）を挙げている。金山説による地域博物館の定義は緩やかだが、金山が掲げる地域博物館の活動の理想は高く設定されていると言える。

以上、地域博物館についてその研究を概観してきた。地域博物館について述べる場合、伊藤説なのか金山説なのかを明確に分けて考えることが肝要であろう。これ以降、伊藤説の地域博物館は『地域博物館』とし、金山説を「地域博物館」と区別して表記する。金山説の「地域博物館」

は現在の多くの博物館を含める定義である。それに対して、伊藤説の『地域博物館』は理想の地域博物館像に近いものを想定していると言えよう。このような地域博物館の概念の枠組みの中で中近東文化センターはどのように位置づけられるのであろうか。

3. 中近東文化センター附属博物館

- 中央志向型博物館から『地域博物館』を目指して

中近東文化センターは東京都三鷹市に所在する研究機関として1979年に開館以来、中近東地域における調査・研究を行ってきた。館内には展示室を有し、博物館としての活動も継続している。2004年度秋季以降、三鷹市・武蔵野市からの財政援助を契機として、より地域に向けた博物館として再スタートを切った。そして、2005年12月1日には登録博物館として認可され、中近東文化センター附属博物館と改称した。

2003年以前の中近東文化センターの博物館活動は、研究活動や所蔵資料の紹介が主であった。従って、機能による分類で位置付けるなら、保存機能（重視）型博物館や研究機能（重視）型（大堀 1997:17; 鷹野 2000:206）となる。また伊藤寿朗による世代別分類（伊藤 1993:141-146; 大堀 1997:20）では、定期的に企画展を開催するなど第二世代的（資料の公開）な活動も実施されたが、基本的には第一世代的（資料の管理）な活動に留まっており、第三世代的な参加志向型の活動は低調であったと言えよう。

『地域博物館』の概念を提唱した伊藤は博物館を中央志向型、地域志向型、観光志向型に分けた（伊藤 1993:15）。その枠組みで分類すると、中近東文化センターは、規模は大きくないものの、全国に成果を発信することを企図していた中央志向型の博物館であったと言える。中近東文化センターは、中近東の文化や歴史を専門とする博物館であり、所在する東京の武蔵野地域とは関連性がなく、また資料の専門性が高いことから、地域の市民が利用するよりも中近東に関心の高い来館者、あるいは研究者向けの博物館とみなされてきた。地域市民への教育普及活動を実施していなかったわけではなく、夏休みなどに小学生向けのワークショップなどをしばしば行い、一定の評価は得られていたものの、「地域博物館」としての積極的な活動は行っていなかった。

地域と関連する資料を持たない研究型博物館が「地域博物館」や『地域博物館』として活動していくことは非常に困難である。また財団法人である中近東文化センターは、公立博物館と比べて地方公共団体との連絡が不十分で公民館や小中学校との連携の機会も少なく、地域との接点も得られ難いという欠点もあった。

そのような中で、「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -」展は三鷹市・武蔵野市からの財政援助、また登録博物館としての準備段階の中で企画された展示であり、中近東文化センターとして新たな展示活動の第一歩であり、中央志向型博物館から「地域博物館」へ、また『地域博物館』を目指す具体的契機となった。

4. 博物館の地域連携

2005年に実施された中近東文化センターの「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -」展における地域連携を述べる前に、近年の国内博物館における地域連携の成果について述べ、中近東文化センターの連携活動との比較を行いたい。

考古学系博物館の地域連携としては、新潟県立歴史博物館、津南町「農と縄文の体験学習館なじょもん」、また長岡市、十日町市、津南町などが中心となった「信濃川火焰街道博学連携プロジェクト」が挙げられる（藤岡・戸田・石田 2006; 山本・金子 2008）。これらは、縄文時代中期の火焰型土器が出土する市町村が中心となった連携で、単なる博物館の地域連携にとどまらない規模のプロジェクトであり、様々なシンポジウム、ツアーも催された。この連携活動で注目されるのは、年間を通じて子供たちと学芸員が触れ合い、市町村の区域を越えた市民交流が実現されたことである（山本・金子 2008:111）。この地域連携により、火焰型土器の出土地域という文化圏が新たに意識されるようになった（藤岡・戸田・石田 2006:42）。その文化圏は既存の市町村の枠を超えた新しいものであり、「地域博物館」や地域連携の活動の目標となりうる。全ての地域連携がこのような複数の市町村で活動できるものではないが、「信濃川火焰街道博学連携プロジェクト」は博物館の地域連携のモデルケースのひとつと言えるだろう。

美術館系の地域連携としては、「越後妻有アートトリエンナーレ2003」の活動が挙げられる（小谷・石上 2003）。この地域連携は美術館を中心としたものではなく、島根大学教育学部美術教育研究室が新潟県越後妻有6市町村（当時：十日町市、川西市、津南町、中里村、松代町、松之山町）で行った美術制作やワークショップ活動である。美術館の地域連携ではないが、その連携プログラムが「美術や造形活動の本質なるものが 人と人 との相互の関係性を基盤に成り立っているという認識」（小谷・石上 2003:43）がなされており、『地域博物館』の概念と符号している。またワークショップでの人々との関わりを重視し、参加した学生のレポートからプロジェクトを検証する（小谷・石上 2003:52）など、今後の博学連携のモデルのひとつと考えられる。先に紹介した「信濃川火焰街道博学連携プロジェクト」も同じ新潟県内での実施であり、地域連携のモデルとなる事例がこの地域に集中していることは興味深い。

民俗歴史系の博物館で地域連携を実施しているのが、高知県立歴史民俗資料館である。同館の活動は県内史・資料の収集・保存・研究に重点が置かれていたが、近年は県民に視線を置いた学校教育及び生涯学習教育のサポート強化、各市町村との連携強化による県内史・資料の保護活動支援など、活動が館内から館外へ、単独から連携へと大きく変動している（猪野 2008:23）。高知県立歴史民俗資料館での地域連携は、県の農業振興部と連携した「郷土の食」についての体験活動、民間芸能の保存継承を行っている団体と連携した「高知県民俗芸能ネットワーク」などが挙げられる（猪野 2008:25-26）。まさに博物館が文化拠点として有効に活用されていると言えよう。

自然史系博物館の地域連携については、佐久間大輔がその可能性について論じている（佐久間 2005）。琵琶湖博物館、兵庫県立人と自然の博物館、大阪府立自然史博物館などにおいて、市民

参加による様々な調査が実施されており、地域住民との結びつきはこれらの博物館にとって大きな特色となっている。そして、市民参加の調査活動には「魅力的で展開しやすい素材や手法の選定」が必要で、「コミュニティとして盛り上がっていく過程が欠かせない」とし、それらをクリアしていくためには学芸員のコーディネーターとしての役割が非常に重要であるとの指摘がある（佐久間 2005:476）。

各地の博物館地域連携を概観してきたが、それらには「新たな文化圏の創出」、「ヒトのつながり重視」、「研究型（博物館）から地域連携」、「学芸員の役割の重要性」などのキーワードが見いだされる。これらは第2節で述べた「地域博物館」や『地域博物館』の重要事項と符号している。このような事項をふまえながら、地域連携活動を実施していくことが肝要であろう。

次節では、中近東文化センターで行われた「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -」展を紹介する。その後、この企画展で実施された地域連携の取組みを「地域博物館」や『地域博物館』、各地の博物館の地域連携の枠組みの中で論じる。そして、中央志向型博物館から『地域博物館』への移行について提言を行いたい。

5. 企画展「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -」

(1) 企画の発案とその狙い

2005年3月19日(土)～7月10日(日)に中近東文化センターで企画展示「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東」が開催された（大津 2005）。この企画展示の計画・構想は、2004年2月16日から同年3月15日までの期間実施された2003年度冬期イラン調査（科学研究費補助金事業「イラン国ギーラーン州セフィールド川流域における民族考古学及び生態考古学的研究」：課題番号14401030、研究代表者 大津忠彦）の一環として、イラン国ギーラーン州マースレにおいて資料調査に従事中、次年度展示企画について相談を受けた大津（中近東文化センター研究員、当時）が、中近東文化センターの展示部門における実質統括者へ答えたところから始まった。

大津はそれからの構想のうちに、1990年より自らが関わり続けていた考古学調査のフィールド「イラン」と、中近東文化センターの経営環境（当時）に見え始めた「地域」（その実質は地域連携というより、地域からの理解・支援）というふたつの要素が漠然として有った。この場合の「地域」とは、中近東文化センターの所在する三鷹市及び隣接の武蔵野、小金井両市すなわち東京西郊の地「武蔵野」である。「イラン」と「武蔵野」という、一見まったく関わりは無いように思われるこれら両地域にとって、「博物館」（この場合は中近東文化センター）がはたして紐帯となり得るか、と思索することとなった。このとき「地域からの理解・支援」がヒントとなる。「地域からの理解・支援」とは、さらに実際的にとらえれば「地域の^{人々}からの理解・支援」なのであり、博物館法等において博物館機能目的の供給先として挙げられる「一般公衆」からの理解・支援ということになる。したがって、博物館の持つ「一般公衆」性を吟味すれば、あるいは「イラン」と「武蔵野」が共通の舞台になり得るのではないかと、思えてきた。そこに「松本清

張」が浮かぶのにさほど時間を要しなかったのは、まったく大津個人の嗜好性による。

大津は長年、松本清張作品を耽読・多読し、その作品世界に「イラン」・「武蔵野」そして「考古学」が濃密に描述されていることを既に熟知していた。また、在北九州市小倉の「松本清張記念館」に豊富な展示物が一般公開されていることも充分理解に有った。これらにより、企画展の主たる狙いは、その素案として次のふたつにおのずと収斂されていった（当時の企画案メモより）：

1. 中近東古代史への関心を大衆化させるに寄与した作家のひとりとして松本清張の業績を紹介する。
2. 松本清張作品に武蔵野の地（三鷹市、武蔵野市）を再発見する。

ただし、上記ふたつだけでは、企画展テーマとしてあまりにも恣意的かつ狭小すぎるころがあるように考えられ、修正検討を経て、下記の展示趣旨に著したような最終形態となった：

「考古学」や「中近東」をその題材に扱った文学作品、またそうした作品がさらに映像化されている事例にわたしたちはしばしば出会います。洋の東西をとわず、ミステリー小説、サスペンス・ドラマ、さらには今まさに全盛の「アニメ」、「コミック」等々に、古代遺跡や発掘現場をその舞台にしたもの、あるいは主人公が考古学者であるものなど種類はじつに様々です。いずれも読み手、鑑賞者を夢中にさせるのはいったいなぜでしょうか。空想世界に浸り、夢、冒険といった非日常性にひとときの癒しを得るから、時空を越えたストーリーの軽妙な進展によって、不確定なものへの奔放な挑戦が叶うから、推理する知的好奇心を働かせることができるから等々いろいろ理由が考えられるかもしれません。このような世界を、自らの文学作品の一ジャンルに確立して特色ある作家のひとりとして松本清張（本名きよはる、1909～92年）を挙げることができるとでしょう。「社会派^{ミステリー}推理小説」を創出したことでつとに知られたこの芥川賞作家は同時に、その独自の「清張史観」から「古代史物」、「考古学物」などと呼称される作品を数多く生み出したことでも注目されます。その人気は不易どころか、最近新たな脚色を加えられたドラマ化作品の好評にみられるように、ファン層はいまなおその厚みを旧に倍する勢いです。

このたびの企画展は、近代小説が「考古学」や「中近東」を題材に扱い、それらへの関心を高揚、大衆化するに寄与したらしいことを、とくに松本清張の世界を通して紹介するものです。同時に、作品の舞台のひとつとして頻出の、また、松本清張の作家活動の拠点でもあった当地「武蔵野」を作品中に訪ね、この機会に「松本清張文学散歩路」としてあらためて逍遙してみたいとおもいます」（大津 2005:1）。

この企画展趣旨に則り、図録構成は下記のようなになった（カッコ内は執筆者）：

小説に読む考古学 世評と資料性 （大津忠彦）

松本清張と考古学、中近東

- ・国民的作家松本清張の生涯とその世界（中川里志）
- ・松本清張記念館について（藤井康栄）
- ・松本清張作品にみる「考古学」（大津忠彦）
- ・松本清張と古代中近東 とくに古代イランについて （大津忠彦）

・火の路回想 松本清張先生のイラン遺跡取材に同行して (佐藤修)

松本清張文学作品と武蔵野 (大津忠彦)

ちなみに、図録において主として取り扱われた文学作品は次の通りである：

§ 「小説に読む考古学 世評と資料性」 『真知子』(野上弥生子)、『玉碗記』(井上靖)、『漆胡樽』(井上靖)

§ 松本清張作品にみる「考古学」 『半生の記』、『エッセイより 実感的人生論』、『不安な演奏』、『清張通史』所収「邪馬台国」、『火神被殺』、『エッセイより 大岡昇平氏のロマンチックな裁断』、『エッセイより 推理小説の読者』、『エッセイより 私の小説作法』、『距離の女囚』、『断碑』、『石の骨』、『笛壺』、『支払い過ぎた縁談』、『途上』、『万葉翡翠』、『葦の浮船』、『月』、『土偶』、『内海の輪』、『鷗外の婢』、『巨人の磯』、『ネッカー川の影』、『神の里事件』、『礼遇の資格』、『カルネアデスの舟板』、『波の塔』、『高台の家』、『不安な演奏』、『高校殺人事件』(以上、すべて松本清張著)

§ 松本清張と古代中近東 とくに古代イランについて 『ペイルート情報』、『ペルセポリスから飛鳥へ』、『砂漠の塩』、『火の路』、『眩人』、『白と黒の革命』、『十二の紐』より「ペルシアの測天儀」、『瑠璃碗記』、『熱い絹』、『清張日記』、『クレオソートと玉碗 正倉院とイランの古美術店』(以上、すべて松本清張著)



図1 「小説に読む考古学 松本清張文学と中近東」のチラシ(表・裏)

(2) 企画における地域「武蔵野」の文学性

図録において、地域「武蔵野」に関連してとりあげたおもな文学作品は次の通りである：

§ 松本清張文学作品と武蔵野 『武蔵野』（国木田独歩）、『高校殺人事件』、『声』、『喪失の儀礼[深大寺]』、『歪んだ複写[三鷹・武蔵境・武蔵小金井]』、『皿倉学説[玉川上水]』、『鴉』、『礼遇の資格』、『黒い福音』、『不安な演奏[布田]』、『剥製』、『新開地の事件』、『考える葉』、『真贋の森[国分寺]』、『捜査圏外の条件[阿佐ヶ谷]』、『凝視』（以上、松本清張著。なお[]内はおもな登場地名例）

周知のごとく、清張作品は日本国内津々浦々をその舞台としているが、なかでも「武蔵野」を取り扱った事例数は群を抜いている。「松本清張全集」やこれに収録されていない作品等をざっと渉猟しただけでも、「武蔵野」に関わる描写は33作品において見出される。そしてその約7割、24作品が昭和30年代、また約2割、7作品が昭和40年代に著わされたものであった。すなわちほとんどが、昭和30、40年代、つまり東京が西へ急激に膨張していた時期にあたる。したがって清張は、たとえば「武蔵野」の雑木林地帯が開発によって消滅して行く様子をリアルタイムに伝える描写法をとること再々である。そこには「アパートや公団住宅が次々に建った」（『歪んだ複写』）、電車が「朝夕は乗客で混み合う」（『黒い福音』）、「古い街道も自動車の通行が激しくなった。団地が出来、住宅地がふえるに従い、それまで間道のようにみられたこの街道が普通なみの車の往來の道路になってしまった」（『交通事故死亡1名』）、と変容著しい地域と化しつつあった。なかでも『新開地の事件』（昭和44年）は旧「東京都北多摩郡」を舞台として、武蔵野の変容ぶりが単に自然景観にとどまらないことを著わして妙である。

清張推理小説における舞台として武蔵野は「殺人現場」、「死体遺棄現場」、「容疑者のアジト」等々、まさに事件多発地帯の様相を呈する。実際に起きた事件を題材とする『「スチュワードス殺し」論』（昭和34年8月発表、現場は杉並区善福寺川）や、『小説 3億円事件米国保険会社内調査報告書』（昭和50年12月発表、現場は府中市）はともかく、事件現場は深大寺、武蔵境、多摩川河畔、田無、布田、等々きわめてローカルではある。清張は、そこが如何なるところであるかについて、例えばそこに繁る樹木、独特の地勢、地質、そこで営まれる生業、はたまたバードウォッチングよろしく鳥の数々、そして名所旧跡（たとえば東京天文台、深大寺）、行楽地（高尾山）等々を語り、そしてそこにはかならずや人の日常、現実を配して濃厚な作品としている。

この作風に関しては、松本清張以前に、忘れざるべき著名作家がある。すなわち「自然主義者」とよばれた明治期詩人・小説家の国木田独歩（1871～1908年）は、『武蔵野』（原題『今の武蔵野』、1898年）において、武蔵野には自然と生活との混在にこそ、その趣の源泉があることを著わしている：

* 「畑は即ち野である。されば林とても数里にわたるものなく否、恐らく一里にわたるものもあるまい、畑とても一^{いちぼう}眸数里に続くものはなく一座の林の周囲は畑、一^{いつけい}頃畑の三方は林、という様な具合で、農家が其間に散在して更^さらにこれを分割して居る。即ち野やら林やら、ただ乱雑に入組んで居て、^{たちま}忽ち林に入るかと思えば、^ま忽ち野に出るといふ様な風である。それが又た実に武

蔵野に一種の特色を与えて居て、ここに自然あり、ここに生活あり、北海道の様な自然そのままの大原野大森林とは異て居て、其趣も特異である。」

* 「武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其処にみるべく、聞くべく、感すべき獲物がある。武蔵野の美はただ其縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことに由て始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただ此路をぶらぶら歩いて思いつき次第に右し左すれば随処に我等を満足させるものがある。これが実に又た、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感じて居る。武蔵野を除て日本に此様な処が何処にあるか。林と野とが斯くも能く入り乱れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る処が何処にあるか。実に武蔵野に斯る特殊の路のあるのは此の故である。」

さらに、「布田、登戸、二子などのどんなに趣味が多いか」とする友人の武蔵野観に関連して、今日ではあきらかに都心部と区分される地域を含めて「町外ずれを「武蔵野」の一部に入れるといえ、少し可笑しく聞えるが、実は不思議はないので、海を描くに波打ち際を描くも同じ事である」と取敢てことわったうえで、次のように武蔵野への感興の基に想いをめぐらしている：

* 「必ずしも道玄坂といわず、又た白金といわず、つまり東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道となり、或は中原道となり、或は世田ヶ谷街道となりて、郊外の林地田圃に突入する処の、市街ともつかず宿駅ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場処を描写することが、頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。なぜ斯様な場処が我等の感を惹くだろうか。自分は一言にして答えることができる。即ち斯様な町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思をなさしむるからであろう。言葉を換えて言えば、田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語、小さな物語、而も哀れの深い物語、或は抱腹するような物語が二つ三つ其処らの軒先に隠れて居そうに思われるからであろう。更らに其特点を言えば、大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とが此処で落合って、緩かにうずを巻いて居るようにも思われる。」

「社会というものの縮図でも見るような思をなさしむる」武蔵野なればこそ、さまざまな姿の人影が物語の題材となり、あるいはまたその舞台として意味をなす。これこそ、松本清張の諸作品において「武蔵野」が多用された意味合いと相共通するところと思われる。作家の居所がたまたまそこにあったこともたしかに要因ではあったろうが、「社会」に向けられて人の営みの日常性にこだわった作風と、武蔵野の自然が漂わす人間臭への鋭敏な嗅覚とが相乗した結果、松本清張は数多くの武蔵野を描いた作品を生み出すことになったと思われる。松本清張とほとんど同時代の作家のひとり大岡昇平（1909～1988年）の名作のひとつで、物語の舞台背景として武蔵野の自然が豊かに描かれた『武蔵野夫人』（1950年）もまた、その主題となっている男女間の恋愛事は、独歩流にみれば武蔵野ならではの「軒先に隠れて居そうに思われる」物語のひとつともいえよう。

ちなみに、松本清張の初期作品中には、「武蔵野」の先覚者としての独歩を、おそらく清張の感興として代弁させたと思われる件を見出すことができる。すなわち、登場人物のひとりで九州

から夏季休暇中に上京したという設定の女子高校生の話しぶりの一節である：

* 「「すばらしい所ね。ほんとに、武蔵野のなごりが、そのまま残っているみたいだわ。こんなクヌギ林を見てると、独歩の小説を思い出すわ」彼女は文学少女だった。国木田独歩の『武蔵野』の一節を口ずさんだりした。」(『高校殺人事件』、原題「赤い月」、昭和34年11月～昭和35年3月)

武蔵野の雑木林については『喪失の儀礼』において「明治の文豪徳富蘆花の住居は武蔵野の雑木林の中にあつたが、その旧居がいまは公園となって保存されている」と徳富蘆花の名に言及したところがある。この徳富蘆花(1868～1927年)もまた『自然と人生』(1900年)において、「雑木林」と題して武蔵野のそれを愛でている：

* 「東京の西郊、多摩の流に到るまでの間には、幾箇の丘あり、谷あり、幾条の往還は此谷に下り、此丘に上り、うねうねとして行く。谷は田にして、概ね小川の流あり、流には稀に水車あり。丘は拓かれて、畑となれるが多きも、其処此処には角に劃られたる多くの雑木林ありて残れり。余は斯雑木林を愛す。木は檜、櫟、榛、栗、樺など、猶多かる可し。大木稀にして、多くは切株より簇生せる若木なり。下ばえは大抵綺麗に払いあり。稀に赤松黒松の挺然林より秀でて翠蓋を碧空に翳すあり。霜落ちて、大根ひく頃は、一林の黄葉錦してまた楓林を羨まず。其葉落ち尽して、寒林の千万枝簇々として寒空を刺すも可。日落ちて煙地に満ち、林梢の空薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる。尤も可。(後略)」

「武蔵野」の風情・地勢は清張文学の大きな構成要素を成している。国木田独歩の云う「人をして社会というものの縮図でも見るような思をなさしむる」、「物語、小さな物語、而も哀れの深い物語、或は抱腹するような物語が二つ三つ其処らの軒先に隠れて居そうに思われる」、「大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とが此処で落合って、緩かにうずを巻いて居るようにも思われる」とは、まさに清張小説の「社会派」そのものではなかるうか、と思わされるのである。

6. 「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 - 」展における地域連携

(1) 清張文学散歩

このツアーは、本企画展の目玉の催し物の一つであり、5月7日(土)と5月14日(土)の二日間にわたって実施された。東京都の武蔵野地域と松本清張という、一般には関係性が把握しにくい組み合わせを、バスツアーで関係各所を訪れることにより実体感し、その深いつながりを武蔵野地域の新たな魅力として再認識するための取り組みであった。このバスツアーは、武蔵野地域にバス営業路線網を持つ小田急バス株式会社と連携することにより可能になった。地域の交通事情に精通した地元バス会社の協力があればこそ、円滑にコースを巡ることができた。また小田急バス株式会社には本バスツアーの意義に理解を頂き、ほぼ実費のみでバスの運行を実施して頂いた。ツアーコースは、小田急バス株式会社のバス路線エリア外も含まれていたため、事前に数回の打合せを行い、コースや駐停車場所の確認を入念に行った。

第一日目の5月7日(土)は晴天に恵まれ、15名の参加者があった。

見学コース

10:00 中近東文化センター集合 館内見学

10:40 バス出発

11:10 練馬区関町、松本清張旧借家跡見学

11:30 練馬区上石神井、松本清張旧宅見学

12:00 カトリック井草教会（『黒い福音』に登場する教会のモデル）

13:00 昼食

14:00 大宮八幡宮（『黒い福音』での殺人現場）

15:00 林芙美子記念館

16:30 西武池袋線「椎名町」付近を見学（『日本の黒い霧』所収「帝銀事件」の舞台）

18:00 JR 武蔵境駅あるいは中近東文化センターで解散



図2 バス内で解説を聞きながら見学

練馬区関町、松本清張旧借家

最初に訪れたのは、1954年、45歳の松本清張が初めて家族を呼び寄せ、九州から転居した練馬区関町在の旧借家である。清張自身はその前年から上京し、杉並区荻窪の叔母の家に寄宿していた。1956年には朝日新聞を退社し、創作活動に専念。「顔」、「点と線」などはここで執筆された。現在、この旧借家は残っていない。付近にバスを停車し、旧借家付近を散策した。

上石神井旧宅

1957年（昭和32年）、松本清張は練馬区上石神井に新築移転した。この地で、『眼の壁』、『小説帝銀事件』などを執筆している。1960年、松本清張は作家部門の所得で1位となり、作家としての地位を確立した時期である。1961年、杉並区上高井戸に新築移転。現在、上石神井旧宅は残っていない。当時の写真をみながら、旧宅付近の散策を行った。



図3 上石神井、清張旧宅付近を散策

カトリック井草教会・大宮八幡宮付近

松本清張の小説『黒い福音』の舞台とみられるカトリック井草教会と、同著でスチュワーズ殺人事件が起こった場所である大宮八幡宮付近を訪れた。『週間公論』に連載（1959.11.3-1960.6.7）された長編推理小説『黒い福音』（新潮社）は、武蔵野の面影を残すバジリオ宗派のグリエルモ教会が舞台。

1959年に杉並区善福寺で起きたスチュワーズ殺人事件に取材した作品であり、事件が起こっ

ていく様子が描かれ、また読者には最初から犯人が分かっているスタイルである。このスタイルの推理小説には「刑事コロンボ」などがある。

バスツアーの見学場所は、小説の舞台であるとともに、実際のスチュワーデス殺人事件の現場でもあった。



図4 井草周辺を散策

林芙美子記念館

西武新宿線中井駅近くにある林芙美子の旧宅を利用した記念館である。松本清張の短編『断碑』

のモデルとなった考古学者森本六爾と林芙美子とはパリで交流があった。また『渡された場面』で登場する「千鳥旅館」の女中の真野信子は林芙美子のファンとして描かれており、林芙美子は松本清張に関連する作家でもある。『断碑』（原題『風雪断碑』）は『別冊文藝春秋』に1954年に掲載された短編小説であり、清張と考古学の関係を示す作品のひとつ。『断碑』では才能があるものの、早世した考古学者の生涯が語られる。

豊島区長崎町西武池袋線椎名町周辺

『小説帝銀事件』（1959年）で描かれた帝国銀行（後の第一勧業銀行、現みずほ銀行）椎名町支店強盗殺人事件の現場である。現在、椎名町支店の建物は残っていない。この付近は小田急バス株式会社の路線エリアではないため、付近のバス停留所などを使用することもできず、また、ドライバーも道路状況に精通していないため、本バスツアー中最大の難所であった。しかしながら、清張が武蔵野地域に居住していた時に執筆された作品であり、また清張の特徴のひとつでもあるノンフィクション作品の出発点となる作品舞台としても重要であった。

清張文学散歩2日目は5月14日（土）に実施した。7日と同じ15名の参加者があり、この日も晴天に恵まれた。

見学コース

- 10：00 中近東文化センター集合 館内見学 展示解説
- 11：00 バス出発
- 11：15 三鷹市禅林寺 森鷗外・太宰治墓碑見学
- 12：00 調布市深大寺 昼食後、天文台まで散策、『波の塔』の散策ルート（14：00着）
- 15：10 杉並区浜田山の松本清張邸見学
- 16：30 調布市布田の日活撮影所、多摩川を通過
- 17：10 JR 武蔵境駅あるいは中近東文化センターで解散

三鷹市禅林寺

清張は芥川賞を受賞した『或る「小倉日記」伝』以外にも、『鷗外の婢』、『削除の復元』、そして遺作『両像・森鷗外』で作家森鷗外をしばしば取り上げている。その鷗外の墓が三鷹市禅林寺に所在する。

禅林寺は明暦の大火（1657年）後、三鷹市連雀町に建立された。1699年に台風で倒壊したが、再建され現在に至っている。黄檗宗の寺院で、森鷗外の墓の他、太宰治の墓、三鷹事件遭難者慰霊塔などがある。森鷗外は当初墨田区向島の弘福寺に埋葬されたが、関東大震災で弘福寺が全焼したため、同じ宗派の禅林寺に墓が移された。禅林寺付近の橋停留所に降り、禅林寺墓地を見学。清張と関連はないものの、併せて太宰治墓碑を見学した。また、付近の玉川上水に太宰治が自殺したところと伝わる場所があり、こちらも併せて訪れることが出来た。



図5 禅林寺、森鷗外墓地を見学

調布市深大寺、都立神代植物公園、三鷹市国立天文台

深大寺は『波の塔』、『歪んだ複写』、『喪失の儀礼』、『笛壺』などの舞台となる天台宗の寺院である。清張は『東京の旅』（樋口清之との共著、光文社文庫）でこの寺の歴史についても述べている。

『波の塔』は『女性自身』に1959年に連載された長編小説。武蔵野在住作家清張が地元を舞台にして描いた小説のひとつである。この作品は、多くの有名女優（有馬稲子、池内淳子、村松英子、



図6 神代植物公園、バラ園を散策

桜町弘子、加賀まりこ、佐久間良子、池上季美子、麻生祐未）が主演して頻繁に映画・ドラマ化された清張の代表的作品のひとつである。特に女主人公が最後に富士の樹海で姿を消すシーンで有名となった。不倫を題材にした小説であり、深大寺から天文台への散策がその舞台である。深大寺門前で昼食を取った後、天文台まで約2時間の散策を行った。天文台までには都立神代植物公園があるため、園内を見学しながらの散策となった。

杉並区浜田山（高井戸）の松本清張邸

1961年、清張は杉並区上高井戸に自宅を新築して転居した。この前年に所得の作家部門で1位となり、直木賞選考委員のひとりにもなり、小説家として不動の地位を築いた。清張が転居した当時の浜田山はまだ武蔵野の自然が残る閑静な住宅地だった。北九州市立松本清張記念館内には、

ここの書斎・書庫などが再現されている。現在も清張夫人が生活されており、大人数での見学は叶わず、バスで邸前を徐行するだけの見学となった。

調布市布田・日活撮影所・多摩川・武蔵境

バスツアーの最後に中近東文化センター周辺の清張作品の舞台を巡った。まず、『不安な演奏』（1961年）で犯人の隠れ場所となる調布市布田である。小説中では、雑木林がはてしなく広がるという表現がされているが、現在ではそのような風景を見ることはもはやできない。『黒い画集』（1958-60年）では、日活撮影所付近が舞台となっている。小説内では、寂しく松林や雑木林がところどころあって、あとは一面の畑である、という描写があるが、現在は閑静な住宅街となっている。『黒い樹海』（1958-60年）でも日活撮影所周辺と思われる描写がある。清張は同撮影所周辺の風景を小説の舞台として頻繁に選んでいる。『死の枝』（原題『十二の紐』1967年）では多摩川が死体発見現場として描かれている。『歪んだ複写』（1959-60年）では、中近東文化センターの最寄り駅であるJR 武蔵境駅近辺が死体発見現場となっている。清張が小説内で描写する現場とは、雑木林に囲まれた「武蔵野」である。そのような風景は現在では殆ど残っていない。そのような地域の古い記憶が松本清張という作家を通じて蘇ってくるのである。

(2) 劇団前進座朗読劇

4月9日（土）には劇団前進座による朗読劇「或る『小倉日記』伝」が開催された。劇団前進座は武蔵野市吉祥寺に劇場を持ち、武蔵野地域の芸術・文化施設として著名である。松本清張は戦前から前進座のファンで、1968年には大佛次郎らと前進座を応援する「矢の会」を発足させた。前進座は松本清張と武蔵野地域を結ぶ接点のひとつと言える。

中近東文化センターでは、前進座と松本清張の強い関係を「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -」展で紹介すべく、前進座と交渉した結果、様々な協力を頂けることとなった。まずは本節で紹介する朗読劇であり、また「矢の会」の会報や松本清張原作の『左の腕 - 無宿人別帳 -』の舞台写真など、貴重な資料を借用することができた。松本清張と前進座の歴史を紹介することは、すなわち武蔵野地域の現代史を紐解くことになる。このような資料は前進座コーナーとして展示された。

朗読劇は中村梅雀、柳生啓介、浜名実貴氏によって演じられた。人気俳優中村梅雀氏の出演は当日まで公表していなかったのだが、170名の参集者で中近東文化センターの大講堂はほぼ満席となった。同じ武蔵野地域ではあるものの、中近東文化センターの来館者には前進座を初めて見る方々も多く、また前進座ファンにとっては中近東文化センターの館内は未知の空間であった。松本清張という作家を媒体として、また、この朗読劇をきっかけに両施設への利用が促進されたと考えられる。

この朗読劇は、すでに北九州市の松本清張記念館でおこなわれた活動を中近東文化センターで再度実施したものである。ある程度は、松本清張記念館からの助言は得られたものの、博物館施

設での演劇という試みは他に類例を見つられず、実施にあたっては困難が予想された。

博物館には、ある程度の大きさの講堂を備えている場合が多いが、演劇を行うようには設計されていない。しかしながら、今回の取組みのような朗読劇であれば、特殊な舞台装置などは必要なく、比較的少ないスタッフで運営することができる。その結果、標準的な博物館の講堂で十分対応が可能であることがわかった。今後もこのような活動を継続していきたい。

今回の公演では、3名の俳優の方々に加え、脚本家や演出家などのスタッフに大変お世話になった。それにも関わらず低予算で朗読劇を実施することができたのは、ひとえに前進座の地域連携に対する理解に拠る。博物館と植物園、あるいは動物園といった分野横断的な地域連携は、これまでも紹介されてきた(足立 2009b)。しかしながら、博物館と演劇という異業種横断的な地域連携は類例が少ないと考えられる。

7. まとめ

中近東文化センター附属博物館は中央志向型博物館としてスタートし、研究機能重視型博物館としても長年の実績がある。その成果をどのように地域に還元していくかが、今後の課題と言える。その具体的事例のひとつが、今回紹介した「小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -」展の様々な地域連携活動である。

「地域博物館」や地域連携の活動は小中学生向けのものが多いが、研究重視型博物館の成果は子供向けにすることが困難であった。そのため、中近東文化センターでは一般向けの地域連携を試みた。この試みのひとつが、松本清張文学を通して中近東文化センターの活動を地域に紹介することであった。松本清張の小説は社会の諸問題を鋭く捉えた名作が多く、頻繁に映画化・テレビドラマ化されているように一般にとって魅力的な題材である。

中近東文化センター附属博物館のように中央志向型博物館から「地域博物館」的な活動に移行する博物館にとって、様々な地域連携を高めることは重要である。そのような時に、研究活動をわかりやすく伝えるという工夫の中に、地域の隠れた題材、意外性のある題材を混合させることで、より効果的な地域連携が図れると考えられよう。今回紹介した企画展示では、松本清張という作家を媒体として、新たな地域の文化的価値を発見したり、前進座の協力によって異業種横断的な地域連携活動を実施したりすることができた。このような新たな視点から地域の文化的価値を発掘することにより、これまで中央志向型であった博物館が「地域博物館」として脱皮できると考えられる。



図7 前進座による朗読劇

しかしながら、そのような題材が容易に着想できるわけではない。今後は地域の大学など研究機関との「博学連携」を高め、本稿で紹介した「松本清張文学」のように地域と博物館との結節点となるような魅力的な題材を鋭意模索・議論していくことが肝要であろう。中近東文化センター附属博物館の2009年度の夏季展示は、自然科学研究機構国立天文台と連携して、「中近東の星座と神話」展を開催する。異分野の研究機関と連携することにより、新たな視点からの発想を展示に加え、地域の文化拠点としての活動を強化していくことを目指している。

引用・参考文献

- 足立拓朗 2009a 「夏休み自由研究ワークシートを活用した博物館利用と博物館連携」『ORIENTE』38、7-12頁。
- 2009b 「ワークショップにおける博物館連携の可能性について」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』23巻、26-32頁。
- 伊藤寿朗 1986 「地域博物館論 - 現代博物館の課題と展望 -」浜名功（編）『現代社会教育の課題と展望』明石書店、232-296頁。
- 伊藤寿朗 1993 『市民のなかの博物館』吉川弘文館。
- 猪野満 2008 「館内から館外へ、単独から連携へ - 博物館の地域連携活動実践報告 -」『博物館研究』Vol.43. No.5 (479号)、23-27頁。
- 大津彦彦（編著）2005 『小説に読む考古学 - 松本清張文学と中近東 -』中近東文化センター。
- 大堀哲 1997 「博物館概論」大堀哲（編）『博物館学教程』東京堂出版、9-38頁。
- 金山善昭 1999 『地域博物館のソーシャル・マーケティング戦略 - 童話作家山中直治を復活させた野田市郷土博物館』ミュゼ。
- 金山善昭 2003 『博物館学入門 - 地域博物館学の提唱 -』慶友社。
- 川添登（監修）2001 『地域博物館への提言 - 討論・地域文化と博物館 -』ぎょうせい。
- 小谷充・石上城行 2003 「造形活動を通じた地域との関わりとその教育的視点 - 越後妻有アートトリエンナーレ2003への参加から -」『島根大学教育学部紀要（教育科学）』第37巻、43-57頁。
- 佐久間大輔 2005 「自然史系博物館の生態学分野における潜在的可能性 - 総合討論をふまえた現状分析と連携の提言 -」『日本生態学会誌』55巻3号、474-480頁。
- 鷹野光行 2000 「博物館の分類」加藤有次・鷹野光行・西源二郎・山田英徳・米田耕司（編）『博物館学概論』雄山閣出版、199-211頁。
- 高橋信裕 2001 「地域博物館をめぐる歴史的展開」川添登（監修）『地域博物館への提言 - 討論・地域文化と博物館 -』ぎょうせい、17-27頁。
- 端信行 2001 「地域博物館をどう捉えるのか？ - 伊藤説の見直し -」川添登（監修）『地域博物館への提言 - 討論・地域文化と博物館 -』ぎょうせい、28-31頁。
- 藤岡達也・戸田智・石田浩久 2006 「学校・博物館を取り込んだ地域連携による景観の活用について - 信濃川中流域における火焰型土器出土の縄文遺跡に関する連携から -」『歴史地理学』48-1、35-44頁。
- 村上義彦 1995 『新しい地域博物館活動』雄山閣出版。
- 山本哲也・金子和宏 1998 「史跡、博物館と地域連携 - 新潟県・信濃川火焰街道の活動と博学連携」『國學院大學考古学資料館紀要』第24輯、小林達夫先生古稀記念、107-120頁。

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）

（あだち たくろう：中近東文化センター 研究員）